ヒッタイト王国時代の象形文字碑文についてのトルコ現地調査[1]

山本孟

要旨

前 2 千年紀後半のアナトリア(現トルコ共和国)に栄えたヒッタイト王国では、楔形文字だけでなく象形文字が使用されていた。トルコ各地には今なお王国時代に作られた象形文字碑文が刻まれたモニュメントが残っている。それらは、ヒッタイト王国のアナトリアにおける支配領域や中央政権に対抗した政権の存在など、当時の政治状況を知る手がかりとなる。

筆者は、2016 年から 2018 年にかけてヒッタイト王国時代に作成された象形文字碑文の調査を行った。2016 年はトルコ中部、2017 年と 2018 年にはそれぞれ西部・南部に残る碑文の調査を実施した。アナトリア南部のモニュメントは前 13 世紀に本国政権と競合した政権の存在を、西部のモニュメントは親ヒッタイト政権の存在を示すものである。王国末期のアナトリアの政治状況については、楔形文字史料から得られる情報に限りがあるため、調査を行なった各碑文資料はそれを補完する上で貴重である。

キーワード

ヒッタイト王国、象形文字、碑文、モニュメント、トルコ

1. はじめに

前 2 千年紀後半、アナトリアに栄えたヒッタイト王国では、楔形文字だけでなく象形文字が使用されていた。この象形文字は、王国時代に王家の印章などに使われ初め、前 14 世紀以降には碑文に刻まれるようになった。王国崩壊後にも、アナトリアからシリア北部にかけて使用され続け、特に前 10～前 8 世紀に作成された碑文はトルコ南部を中心に多く残っている[2]。筆者は、2016～2018 年、これまでに報告されているヒッタイト王国時代に作成された象形文字碑文を調査してきた。

ヒッタイト王国の地図
（Michele Cammarosano, A Map of the Hittite World (2019/10/19)
https://osf.io/cbyv8/に基づいて筆者が作成した）

ヒッタイト王国時代に造られたものについては、これまでエーリングハウスがトルコに残る各モニュメントを紹介している[3]。近年には、象形文字の研究の第一人者であるホーキンスが、これらのモニュメントの神聖性に着目した議論を展開している[4]。ホーキンスが主張するように、モニュメントはいずれも山中や川沿いに位置することからは、山や川を神聖視したヒッタイトの宗教的施設であったことが推察される。また、必ずしも高台など目立つ場所に建てられていない点で、領域を明示する境界石の役割は少ないように思われる。しかし、その立地からは一定の政治状況を読み取ることも可能である。特に、そのようなモニュメントはトルコ中南部に集中し、一部は王国の中心部から遠く離れた西部エーゲ海沿いに

残っている。楔形文字史料からは、王国時代末期にヒッタイトのアナトリア支配において南部と西部が政治的に特別な立場にあったことがわかっている。本研究ノートでは、筆者が調査した碑文資料を紹介し、建造当時の政治状況から、それらの意義について考察する。

2. 2016 年の調査

2016 年は、アナトリア中部の前 13 世紀後半に作成されたと考えられる象形文字碑文が刻まれたモニュメントを調査した。

2-1. フラクティンとタシュチ

最初に訪れたモニュメントはカイセリ県デヴェリ市のフラクティンに残る。モニュメントはザマントゥ川の側にある切り立った岩を利用したもので、表面には前 13 世紀後半のヒッタイト王ハットゥシリ 3 世と王妃プドゥヘパが嵐の神と女神ヘパトに献酒をする姿が描かれている。また、二人の図像の上にはそれぞれの名前と称号が象形文字で記されている。プドゥヘパの図像の右側には、王妃の称号に加えて「キズワトナ国の娘、神々に愛された者」とあり[5]、彼女が前 14 世紀ごろ王国に併合されたアナトリア南部の国キズワトナ出身である点が強調されていると思われる[6]。

このフラクティンの約 30km 南東に位置するタシュチにも、ザマントゥ川の岸辺に同時代のレリーフが残っている。二つあるレリーフの内、一方には 3 人の人物像が描かれており、「大王ハットゥシリの臣下ジダの息子、ルパキの娘マナジ」という名前が刻まれている。その王がハットゥシリ 3 世であるならば、フラクティンと同じく前 13 世紀後半に作成されたものと考えられる[7]。

フラクティンのレリーフ（筆者撮影）

タシュチのレリーフ（筆者撮影）

2-2. イマンクルとハンイェリ

タシュチから約 20km 西のカイセリ県トマルザ市イマンクルには、アダナへ続く街道に小高い丘がある。その丘の斜面に上記の碑文と同時代のモニュメントが残っている[8]。そこには複数の図像が描かれており、中心には「嵐の神」が、右には有翼の女神の図像がある。左端には戦士の姿が描かれており、象形文字で「クワラナムワ、王子」という名前と称号が記されている。イマンクルから約 10km 東、同じ道路沿いにあるアダナ県トゥハンベイリ市のハンイェリにも象形文字で「王子クワラナムワ」の名前が残されたレリーフが残っている。切り立った巨大な岩の表面には、左に神の像が、右には大きな戦士の図像が刻まれている。戦士の像は丸い帽子を被り、耳にイヤリングをし、先の尖った靴を履いている。また、右手には槍を、左肩に弓を抱え、腰には短剣を指した姿で描かれている。

前 13 世紀に造られたと考えられる、これらのモニュメントが南部へ向かう街道沿いに集中していることは、ここが当時から交通の要所であったことを示していると同時に、この地域が王国の中心部とキズワトナ以南の領域との境界であったことも推察される。

イマンクルのレリーフ（筆者撮影）

ハンイェリのレリーフ（筆者撮影）

2-3. コンヤ：ヤルブルトとハティプ

カイセリからアダナへの幹線道路沿いのモニュメントを見た後、トルコ中央のコンヤ県にあるヤルブルトとハティプのモニュメントを調査した。ヤルブルトのモニュメントは、コンヤ県ウルグン市街地から北西約 20km に位置する山の頂上付近にある。かつての貯水池を囲んで配置された石のブロックには、象形文字で前 13 世紀末の王トゥドゥハリヤ 4 世によるアナトリア南西の国々の征服が記録されている[9]。

2016 年の最後は、コンヤ市街地から南に約 10km のハティプを訪れた。断崖の岩の表面にはレリーフと象形文字碑文が残っている。磨耗が進んでいるが、右端に描かれている戦士の像の後方には、象形文字で「クルンタ、大王、英雄、ムワ

タリ、大王、英雄の息子」と記されている[10]。クルンタは、前 13 世紀の王ハットゥシリ 3 世の甥で、トゥドゥハリヤ 4 世の従兄弟にあたり、ハットゥシリ 3 世からはアナトリア南部のタルフンタッサ国の王に任命されていた。ハティプのある地域は、キズワトナの西にあり、キズワトナとヤルブルト碑文の間に位置したと考えられるタルフンタッサ国の領域にあった可能性が高い。碑文に特徴的なのは、ヒッタイト王にしか使用されない「大王」の称号が使用されている点であり、このことからクルンタは本国の王と同等な地位を主張したという説がある[11]。中央政権と一線を画した地方政権の支配地周辺に碑文が残っていることは、宗教的意義の背景に建造者の政治的主張もあったことを物語っている。

ヤルブルトの全体図（筆者撮影）

ヤルブルトの第一のブロック（筆者撮影）

ハティプのレリーフ（筆者撮影）と手写コピー **(Ehringhaus 2005, p.104)**

3. 2017 年の調査

2017 年はトルコ西部のイズミル県周辺に残るモニュメントを踏査した。主に、前 14 世紀末にヒッタイトの属国となった、アナトリア西部の「アルザワ諸国」の一つであるミラ国にかんする調査となった。

3-1. カラベルとアクプナル

最初に調査したカラベルのモニュメントは古くから知られるレリーフで[12]、イズミル市街地から約 30km 西のカラベル街道にある山の中腹に残る。複数あるレリーフの内で最大の「カラベル A[13]」には戦士の像が描かれており、手に弓と矢を持ち、腰には短剣を指し、頭には先の尖った長い帽子を被っている。その右横に刻まれた象形文字は、ホーキンスによれば、「ミラの王タルカスナワ、ミラ王 BIRD-li の［息子］、ミラ王［…］の孫」と読める[14]。そうであれば、この人物はトゥドゥハリヤ 4 世治世のミラ王であると思われる[15]。

このカラベルの近くにあるアクプナルのモニュメントには、北のマニサ県のシピロス山に刻まれた巨大な神の像が残されている。その側にはイマンクルとハンイェリの碑文にも現れる「ク（ワ）ラナムワ」と読める象形文字があることから[16]、これも前 13 世紀ごろに建造された可能性が高い。

3-2. スラットカヤ

最後に調査したスラットカヤの碑文は、ムーラ県とアイドゥン県にまたがるベシュパルマク山（ラトモス山）の頂上付近にある。切り立った大きな岩のくぼみの表面に象形文字が残っており、左端の文字は「ミラ国」を指し、中心の文字群は「大王子クパヤ」と読めるという可能性が指摘されている[17]。この読みが正しければ、ヒッタイト王ムルシリ 2 世の治世にミラの王であったクパンタ・クパンタを指しているのかもしれない。

アナトリア西部のアルザワ諸国は、前 14 世紀末、ムルシリ 2 世によってヒッタイトの属国とされた。トゥドゥハリヤ 4 世の時代には、反ヒッタイト勢力と対抗するための戦略上、ミラが重視されており、ここに親ヒッタイト政権が成立し、同国はヒッタイトと国境を接するようになっていた。モニュメントが残る地域はヒッタイト時代のミラ国の領域と重なっており、ヒッタイト中央政権に近い政権があったことが反映されているのかもしれない。

カラベル A（筆者撮影）

アクプナルのモニュメント（筆者撮影）

スラットカヤの碑文（筆者撮影）

4. 2018 年の調査

2018 年は再びトルコ中部から南部での調査を行った。王国時代のシルケリとハミテの碑文、王国滅亡後に作成されたと考えられるクズルダーとブルンカヤの碑文を紹介する。

4-1. シルケリとハミテ

シルケリのレリーフと碑文は、アダナ県にあるシルケリ・ホユック遺跡の麓を流れるジェイハン川の岸辺に立つ岩に彫り込まれている。長いローブを着た人物像の横には象形文字で「ムワタリ、大王、英雄、ムルシリ、大王、英雄の息子」と書かれている[18]。これは、都をハットゥシャからアナトリア南部のタルフンタッサへ一時遷都した、前 13 世紀半ばの王ムワタリ 2 世と思われ、シルケリが位置する地域もタルフンタッサかその周辺であったと考えられる。

その後はシルケリ近郊のハミテに訪れた。ジェイハン川近くの平原に立つ岩の表面に描かれる戦士の像は、右手に槍、左肩には弓をもって、腰には短剣を指している。その姿はハンイェリのレリーフと非常によく似ている。レリーフ横の碑文には「x-タルフンタ、タルフンタピヤの息子」と記される。タルフンタピヤは、ヒッタイト王とタルフンタッサ王ウルミ・テシュブの条約の中で証人として現れることで、その名が知られる人物である[19]。この条約はハットゥシリ 3 世かトゥドゥハリヤ 4 世が発行したものであるため、ハミテのレリーフも前 13 世紀半ばから同世紀末に作成されたと考えられる。これらのレリーフはタルフンタッサ国の領域近くに造られたか、同国との関係が深いものであることが示唆される。

シルケリのレリーフ
（筆者撮影）

ハミテのレリーフ（筆者撮影）

4-2. クズルダーとブルンカヤ

アダナでの調査後、コンヤ県でもタルフンタッサと関係の深い碑文の調査を行った。その一つがカラマン市郊外のクズルダー山に残る碑文である。頂上付近

にある岩の表面には座した人物が描かれており、左手に笏を、右手には鉢をもっている。像の頭の右横には象形文字で「大王ハルタプ」の文字がある。その南東方向には他にも碑文があり、そこには「嵐の神（に）愛された者（？）、太陽、大王ハルタプ」とある[20]。上述のように、この「大王」号はヒッタイト王が使用した称号であった。

次に訪れた碑文は、コンヤ県の東隣アクサライ県ギュチュンカヤにある丘ブルンカヤに残されたものである。この岩にも「この場所［で］ハルタプ、大王、嵐の神に愛され（た者？）、ムルシリ、大王、英［雄］の［息子］…は打った／打つだろう。」と記され、ハルタプとムルシリの名が現れる[21]。ハルタプは、王国滅亡の前後に、この地域にあったと思われるタルフンッシャ国の王であったのかもしれない。

「大王」ハルタプの支配領域は、クズルダーやブルンカヤがある地域に広がっていたと考えられる。碑文に名を挙げられるムルシリはウルヒ・テシュブ（即位名ムルシリ 3 世）であったとも指摘されている[22]。ヒッタイト王ウルヒ・テシュブは叔父ハットゥシリ 3 世に王位を簒奪された人物であったため、その家系は王位継承家系からは外れたが、一方で、上述のようにウルヒ・テシュブの兄弟にあたるクルンタはハットゥシリ 3 世からタルフンタッサの王に任命されている。そのため､クルンタをはじめとするウルヒ･テシュブの家系の者たちがタルフンタッサ政権を担い続け、王国末期には中央政権と競合したと考えられる。

クズルダーの人物像
（筆者撮影）

ブルンカヤの碑文（筆者撮影）

5. おわりに

ヒッタイト時代に造られた象形文字を伴うモニュメントは国境を示す境界石ではなかったと考えられるが、王国と一定の文化を共有し、かつ特別な関係にあった地域の広がりを示すものである。中南部にはヒッタイト王国が建造したモニュメントと、本国政権と競合したタルフンタッサやこれと密に関係する後の政権が勢力圏を示すために建造したと思われるものが並存している。西部のモニュメントはミラ国にあった親ヒッタイト政権の存在を示すと同時に、それらは同国が自国領土を主張するために造ったものなのかもしれない。この種のモニュメントは宗教的施設でありながら、あるいはそうであるからこそ、各政権が領域支配の正当性を主張するものであったとも言える。その点で、本研究ノートで紹介した碑文資料はヒッタイト時代のアナトリアにおける本国と地方政権の政治的関係を表す指標になる。特に、前 12 世紀以降のアナトリアの政治状況については楔形文字史料の情報が限られているため、碑文資料はそれを補完しうる点で非常に貴重である。これらの碑文資料を、楔形文字史料に読み取れる歴史と、より具体的に結びつけることを今後の研究課題としたい。

注

1 本研究は、2016 年度京都大学教育研究振興財団の助成と、JSPS 科研費若手研究（B）17K13549 の助成を受けたものである。なお、本研究ノートで紹介したモニュメントの写真は、山本孟「ヒッタイトの世界」https://hittiteanejphy.com/にも掲載している。

2 象形文字ルウィ語碑文とその翻訳については、J. David Hawkins, *Corpus of Hieroglyphic Luwian Inscriptions, Vol.1, Parts 1-3, Inscriptions of the Iron Age* (Berlin and New York: Walter de Gruyter, 2000)および Annick Payne, *Iron Age Hieroglyphic Luwian Inscriptions* (Atlanta, Georgia: SBL Press, 2012)を参照されたい。

3 Horst Ehringhaus, *Götter, Herrscher, Inschriften: Die Felsreliefs der Hethitischen Grossreichszeit in der Türkei* (Mains am Rhein: Verlag Philipp von Zabern, 2005).

4 J. David Hawkins, “Hittite Monuments and Their Sanctity,” in *Sacred Landscapes of the Hittites and Luwians*: *Proceedings of the International Conference in Honour of Franca Pecchioli Daddi Florence, February 6th-8th 2014* (Anacleto D’Agostino, Valentina Orsi and Giulia Torri, eds., Firenze: Firenze University Press, 2015), 1-10.

5 J. David Hawkins, “Hittite Monuments and Their Sanctity,” p.3.

6 キズワトナとそのヒッタイト王国への併合については、Trevor Bryce, *The Kingdom of the Hittites* (New York: Oxford University Press, 2005), 139 に概説されている。

7 タシュチのレリーフと象形文字の解題については以下を参照されたい。J. David Hawkins, “Excursus 7. Interpretation of the rock inscription TASÇI,” in *Die Prinzen- und Beamtensiegel der hethitischen Großreichszeit auf Tonbullen aus dem Nişantepe-Archiv in Hattusa, mit Kommentaren zu den Siegelinschriften und Hieroglyphen von J. David Hawkins* (Boğazköy-Ḫattuša XIX) (Suzanne Herbordt, ed., Mainz: Verlag Philipp von Zabern, 2005),

pp.292-293.

8 J. David Hawkins, “Hittite Monuments and Their Sanctity,” pp.3-4.

9 ヤルブルトの碑文の内容については以下を参照されたい。J. David Hawkins, *The Hieroglyphic Inscription of the Sacred Pool Complex at Hattusa (Südburg)* (Wiesbaden: Harrassowitz Verlag, 1995), 66-85.

10 Horst Ehringhaus, *Götter, Herrscher, Inschriften: Die Felsreliefs der Hethitischen Grossreichszeit in der Türkei,* p.102.

11 タルフンタッサ王クルンタはヒッタイト王トゥドゥハリヤ 4 世と対立した可能性がある。Trevor Bryce, *The Kingdom of the Hittites* (New York: Oxford University Press, 2005), 319-321. また、Itamar Singer, “Great Kings of Tarhuntašša,” *Studi Micenei ed Egeo Anatolici* 38 (1996), 63-71 は、ヒッタイト王国には当時二人の「大王」が並存したと主張している。この可能性を踏まえると、たとえ直接の対立がなかったとしても、ある時期からタルフンタッサは中央政権と競合していたのだと考えられる。

12 Billie Jean Collins, *The Hittites and Their World* (Atlanta, Georgia: SBL Press, 2007), 18.

13 このレリーフは2019年に何者かによって破壊されており、写真のような状態にはない。

14 J. David Hawkins, “Tarkasnawa King of Mira,”*Anatolian Studies* 48 (1998), 1-31.

15 Trevor Bryce, *The Kingdom of the Hittites*, p.306.

16 J. David Hawkins, “Hittite Monuments and Their Sanctity,” pp.2-3. ただし、ハンイェリとイマンクルに現れるクワラナムワと同一人物だと断定されてはいない。

17 Anneliese Peschlow-Bindokat and Suzanne Herbordt, “Eine hethitische Großprinzeninschrift aus dem Latmos. Vorläufiger Bericht,”*Archäologischer Anzeiger* 2001, 363-367. ミラ王クパンタ・クルンタは、ムルシリ 2 世の治世に服従したミラ王マシュフイルワと、彼と結婚したヒッタイト王女の養子であった。ただし、Oreshko は「クパヤ」の読みに否定的である。Rostislav Oreshko, “Hieroglyphic Inscriptions of Western Anatolia: Long Arm of the Empire or Vernacular Tradition(s)?,” in *Luwian Identities: Culture, language and religion between Anatolia and the Aegean* (Alice Mouton, Ian Rutherford and Ilya Yakubovich eds. Leiden: Brill, 2013), 345-420.

18 Horst Ehringhaus, *Götter, Herrscher, Inschriften: Die Felsreliefs der Hethitischen Grossreichszeit in der Türkei* (Mains am Rhein: Verlag Philipp von Zabern, 2005), 95-101.

19 タルフンタピヤは、ヒッタイト王とタルフンタッサ王ウルミ・テシュブの条約の証人として「王子」の称号を伴って現れる。P. J. van den Hout, *Der Ulmitešub-Vertrag: Eine prosopographie Untersuchung* (Wiesbaden: Harrassowitz Verlag, 1995), 211-215. なお、ウルミ・テシュブはクルンタと同一人物である可能性もあるが、議論がある。

20 クズルダーには他にも「大王」ハルタプの名前が現れる碑文がいくつかある。各碑文の情報については以下を参照されたい。J. David Hawkins, *Corpus of Hieroglyphic Luwian Inscriptions, Vol. 1* (Berlin, 2000), 433-436. ハルタプについては、Trevor Bryce, *The Kingdom of the Hittites*, pp.351-353 に論じられている。

21 J. David Hawkins, *Corpus of Hieroglyphic Luwian Inscriptions, Vol. 1,* pp.437-438.

22 Trevor Bryce, *The Routledge Handbook of the Peoples and Places of Ancient Western Asia* (London and New York: Routlage, 2009), 392. ただし、クズルダーやブルンカヤの碑文に現れる「ムルシリ」はムルシリ 2 世を指す可能性も排除できない。